泉穂のいまどき恋愛講座

男たちは大変な誤解をしている、と思うことがある。気に入った女と一緒にいる時、相手を楽しませようとして、あまりにもお喋りすぎることだ。

先日、ある男性と二人きりでお酒を飲んでいた時のこと。彼は次から次へと息をつく間もなく喋り続け、それはまるでたった数秒間の沈黙さえも許さないような勢いだったので、私は半ば呆れて「いつもそんなに話題が豊富なの？」と遠回しに避難した。すると彼はこう答えたのだった。「黙っていると、あなたは退屈するでしょう？だいいち僕は沈黙が嫌いなんだ。やっぱり女性を盛り上げたいじゃない」と。

彼は勘違いしている。学生のコンパならともかく、いい年をした男が、女と二人きりでお酒を飲んでいるという場面で、相手の気持ちを"盛り上げ"たいのなら、《お喋り》よりも、むしろ《沈黙》を上手に使いこなすべきではないだろうか。

もしも彼が、私にとって遠慮なく何でも話し合える気心の知れた友達だというのなら話は別。ところが彼は、その夜、明らかに私を口説こうとしていた。

もちろん私は、全くソノ気にはならなかった。ひたすら喋り続ける彼に、完璧に退屈していたくらいだった。

ティーンエイジャーの恋は、たくさんのお喋りから生まれるかもしれない。けれども大人たちの恋は、得てして沈黙から生まれる。あるいは、言葉にならない溜め息から。そして、伝えたいことは山ほどあるのに、言葉にできないもどかしさゆえに、ただ黙って相手を見つめる時間から、情熱は生まれてくるものなのだ。

事実私は、息をつく間もなく喋り続ける男に、セックスアピールを感じたことなど一度もないし、私の女友達もこの意見に同意している。

今でも鮮やかに心に焼き付いているシーンがある。私と彼とは、その時、恋をしていた。まだベッドには行っていなかった。そして、ある夜、二人は数回目のデートをすることになる。お互いの都合で、その蓬瀬はほんの一時間だけと最初から決まっていた。伝えたいことはいっぱいあった。一時間しかないんだもの、とにかくできるだけ話したい、と私は思っていた。

けれども、実際のところ、彼と私は、その一時間で、ほんの二言三言しか喋らなかった。いや、喋れなかったのだ。時間はあまりにも早く過ぎて行き、何か喋らなければもったいない、という身を切られるような思いに、喉がカラカラになるほどだった。次に会えるのは、おそらく2週間か3週間後だろう、そう思うと、飢餓感はますますつのっていった。それなのに、言葉が出てこない。時折私は、彼の横顔に釘づけになり、彼は数回、私の顔の上に苦しげな、追いつめられた視線を落とした。その眼差しは、何と素敵に彼の情熱を語っていたことだろう！あなたが好きなのだ、という百万回ほどの告白よりも、あの瞳は、私の心をせつなさで満たしていた。

本当に恋をした時、大人はしばしば言葉を失ってしまう。そのことを知っている女たちは、決して、沈黙を不愉快なものだとは感じない。むしろ、沈黙の中に、相手の言葉にならない告白を、敏感に感じることができるものなのだ。

数ヶ月前、あるパーティーで、とても印象的な輝きを放つ2つの瞳に出会った。私はその瞳に惹きつけられ、彼の前に歩み寄った。照明が暗かったせいで、近くに行って初めて、彼があまりにも若いということが解かった。「あなた、いくつ？」私は尋ねた。「18」と彼は答え、「あなたは？」と訊き返した。「28」私が言うと、彼が少し驚いた表情をしたので、「しかも、結婚しているわ」と肩をすくめた。私は18歳の坊やと何を喋れば良いのか全然解からなかったし、彼の方も28歳の、しかも結婚している女と何を喋るべきなのか知らなかった。私たちに共通の話題はなく、その結果、私と彼とは黙ったまま、時々、微笑み合いながら、カクテルを飲んでいた。パーティーの間じゅう、それでも彼は私の隣にいた。私を口説きもせず、自己紹介もせず、私に質問を浴びせもしなかった。彼は何も喋ることなしに、あの魅力的な瞳で私を見つめ、その結果、たくさんのことを語ったのだった。お喋りな瞳を持つ彼は、今頃どうしているだろう？そう、言葉など残さなくても、強い印象を残すことができるのだ。

この事実を、軽く見てはいけない。言葉を呑みこんでしまった時こそ、あなたの瞳は上手に言葉を語り、その眼差しが女たちをせつなくさせるのだということを。

マンボカーパラダイス
マンボバスで九州キャバレーツアー

東京ラテンムードデラックスという私のやっているバンドが、九州は博多・長崎のグランドキャバレーミナミの営業に、東京からメンバー7人全員が1台のワンボックスカーに乗っていったところまで前回お話ししました。それにしても壮絶な旅でした。荷物持ってかけ足。凄いというか、尊敬しちゃいます。むかし東京パノラママンボボーイズやっていたときにリリースしたCDアルバム『マンボ天国』は佐川急便のドライバーにえらく評判で、長距離夜間の高速道路では疲れが吹っ飛びます、という内容のお手紙をもらったこともありました。

話がそれましたけれど、とにかく片道千四百キロは辛いですよ。おまけに雨の夜の中国道なんて、真っ暗なうえにカーブにアップダす。これらは結構激しい行為の割に、追い越したバスの客が疲れていて、みんな寝てしまっていて誰も気付かないなんていうこともざらですので、いちいち一喜一憂しないことです。修学旅行とかの団体などの場合、どちら

MARUOKA IZUHO

プロフィール 1965年生まれ。
同志社女子大学卒。（株）電通プロックス勤務を経て、現在コピーライター。広告のほかFMラジオ番組のシナリオや出演もこなす。著書に『ありふれた無邪気が罪になる』（PHP研究所）、『キスまで、待てない』（大和書房）など。

HAPPY BIRTHDAY
HAP
ハッピーバースデートゥーマークス